

日時：令和4年2月14日（月）18：00～20：00
場所：オンライン開催
参加人数：41人（事務局除く）

前回に引き続き、オンラインでグループディスカッションを取り入れた手法での開催となりました。全体で地域包括ケアシステム構築の取組報告などを実施した後、オンライン上で6グループに分かれ、各自の「考え方」や「意見」をグループ内で共有・整理し、最後に全体に向けて発表し内容を共有しました。

市長挨拶

皆様、お忙しい中ご参加ありがとうございます。前回（令和3年8月）と同様に新型コロナウイルスの感染者数のピークに重なる時期の開催となりましたが、こういった厳しい状況だからこそ、地域のつながりをつくる地ケアの取組の重要性を再認識するとともに、困っている方や、声を上げられない方も多くいる中では、支援者同士でより連携を深めていくことが大切だと感じています。

川崎市公式LINEにAIチャットボットという機能があり、その中に「悩み・困りごと相談」というカテゴリがありまして、これは相談したいことがあるけれど、どこに相談したらいいかわからないといった場合に相談窓口や支援策を確認できるものです。相談をしたい人だけでなく支援者の皆様にもお使いいただける機能ですので、是非活用いただければと思います。

声なき声をどう拾うかは行政としても大きな課題ですが、アナログでやるところはしっかりやりつつ、このような使えるツールがあれば組み合わせ、引き続き取り組んでまいります。本日は、よろしくお願いします。

川崎市における地域包括ケアシステム構築の取組（地域包括ケア推進室）

（1）目指す「将来のあるべき姿」について

- 推進ビジョンの基本理念を市民の皆様によりわかりやすく身近に感じていただけるよう、具体的な「将来のあるべき姿」を整理している。
- 2025年までの第2段階（システム構築期）では、地域の各主体がそれぞれの役割に応じて具体的に行動できるようになることを目指すとともに、第3段階（システム進化期）に向け2040年を視野に入れた取組を進めていく。

（2）地ケアの構築に向けた具体的な取組

- 地ケア構築に向けて、地域情報を把握し、課題への対応として3つの視点から進めていく。

①意識づくり

- マンガやHPでの広報、イベント、連絡協議会の実施などにより、市民の意識の醸成を促進する。

②地域づくり

- 認知症カフェや子育てボランティアなど住民主体の活動への支援や専門支援とのコーディネートなど、様々な分野でのつながりづくりを進めている。

③仕組みづくり

- 円滑な入退院支援や自立支援、市立看護大学の開学など、持続可能な医療・福祉等のサービスの提供を進めるとともに、様々な分野の相談支援機関の連携やAIチャットボットなどを活用し、誰ひとり取り残さない支援体制づくりを進めている。

地域包括ケアシステムに関する市内の活動紹介「市民ニーズに応じた多様な主体との連携について」

東京ガス株式会社川崎支店 地域広報グループ主任 増田和代氏

（1）くらし見守りサービス

- 川崎市のふるさと納税の返礼品において、一昨年から地場産業に加え、社会課題を解決するサービスも取り扱えるようになり、東京ガスでは、独居高齢者の増加に伴い、「くらし見守りサービス」を提案し、返礼品として採用いただいた。
- このサービスは、市内にお住まいの高齢者を、川崎市外で暮らすご家族が見守ることができ、通信機器との組み合わせにより、高齢者が普段通りの生活ができているか確認ができる。

- 認知度の低さが課題であり、今後も地域包括支援センター等と協力して周知に努めていく。

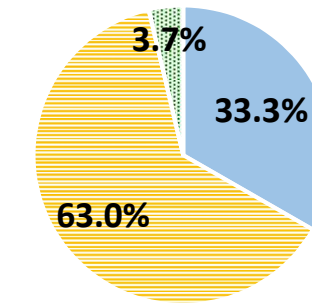
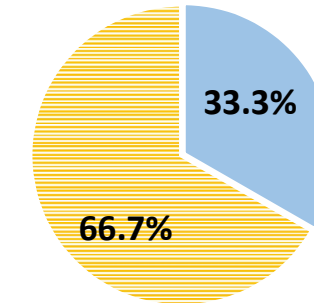
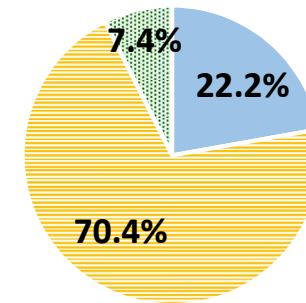
（2）「junijuni」を活用した子ども食糧支援

- 「junijuni」は東京ガスがスポンサーを務める社会貢献型ショッピングサイトで、賞味期限が迫っている食品などをメーカー等から買い取り、安く購入できるもので、コロナ禍で学校が休校になり、給食がなくなることで等により高まった食糧支援のニーズに対する定期的な供給の一助として、川崎ロータリークラブが「junijuni」で食糧を購入し支援先に寄付する仕組みとなっている。

【参加者のアンケート結果】（n=27）

●今回の連絡協議会のプログラムについて

- (1) 地ケア構築取組報告 (2) 市内の活動紹介 (3) ディスカッション



■ とても良かった
■ 良かった
■ どちらともいえない

●連絡協議会のプログラムについて（抜粋）

- (1) 地域包括ケアシステム構築の取組報告
- 非常にわかりやすいスライドで、理解しやすかった。今後の方向性を把握することができた。
 - 地ケア構築に向けて、2040年を視野に入れてフェーズ毎の目標が明確になり、細かな課題に合わせたニーズを掴んで取組が進んでいることが分かった。
- (2) 市内の活動紹介
- 東京ガスの活動を知ることができて良かった。今後いろいろな企業の取組を紹介してほしい。
 - 他の団体と連携し取り組んでいる内容が、素晴らしく大変参考になった。
 - 見守りサービスをふるさと納税の返礼品とする発想が面白い。
- (3) ディスカッション
- 様々な業種の人がいろいろな意見をもっていることを知り、これを総合的に生かす取り組みができれば素晴らしいと思った。
 - 自分が考えていたことと違う視点、考えを聞けてとても刺激になった。対面ワークのような成果物がとても良いと思った。
 - 時間が足りなく、もっと議論を深めたかった。
 - 事前にテーマ情報があれば、もっと深掘りできる。
- (4) その他
- もう少し早い時間に開催してほしい。

- (2) 市内の活動紹介
- 様々な企業の取り組みとその成果、事例報告等
 - SDGsの活動事例
 - 個人事業主やIT系など、比較的小さい規模や若い方々などの課題解決の取組
 - 母子関係や女性が活動する団体の取組
 - 民生委員、生活支援コーディネーターの方々の活動
- (3) ディスカッション
- 地域包括ケアシステムを知ってもらうために、今後どのように市民に周知していくかなど
 - タテ割り意識を打破できるようなテーマ
 - 他業種連携について

●グループディスカッションについて

【進め方等について】

- グループの構成人数は、ちょうど良かった。
- オンラインではなく、対面で議論したい。
- もっと具体的なテーマでディスカッションしてもよいかと思う。

【感想・追加意見等について】

- 人から聞くことでの信頼や、これをあの人にも伝えたいという思いが、より良いサービスとニーズがある人との良い出会いにつながるのだと気付いた。
- 医療や福祉関係の方たちとのグループで、コロナで制限がかかっている中でやれることを模索している前向きな姿勢が素晴らしかった。
- 各団体の取組が点から線、さらに面へと拡大するにはどうしたらよいか色々考えさせられた。
- 各企業や団体の努力のおかげで、様々なサービスが提供されているが、数が多いことで、かえってターゲットとなる人達に十分に届いていない現実も感じた。
- 時間はかかると思うが、行政と企業団体がともに協力して課題解決に向けて情報を整理・集約し、正しく発信する体制を構築すれば、誰もが生活しやすい環境が整うのではないかと感じた。

ディスカッションで話し合いました！ ～企業・団体等のサービスを市民に広く利用してもらうために必要なこと～

市内で活動する保健・医療・福祉関係団体、市民公益活動団体、青少年支援団体、民間企業（金融・保険業、鉄道、運輸、電気・ガス・水道業、配達飲食サービス等）、大学等研究機関等、多種多様な団体からの参加者が6つのグループに分かれ、グループディスカッションを行いました。テーマに関する考え方・意見をオンライン上のグループ内で共有・整理した上で、全体に向けて各グループで話し合った内容の発表を行いました。主な意見をご紹介します（★マークは、各グループで出された意見の中で最も重要だと考えた内容です。）。

Aグループ（ご意見の抜粋）

【仕組みづくり】

- ・良いサービスを説明・紹介できるような場所の連携
- ・情報を整理し、わかりやすいシステムの構築や、アナログでもわかりやすい仕組みづくり

【人のつながり、顔が見える】

- ・市民をいかに巻き込むか、一人からターゲットの輪を広げる。
- ・パワーレスの方（利用者）を発見する。

【双方での見える化】

- ・ニーズの見える化、可視化をする。
- ・行政がそれぞれのニーズごとにリスト化する。

【★対象者と企業側のマッチング】

- ・対象者の意識や自覚を育み、地域の方が背中を押せる場や企業だけでなく多様な主体や人が寄り添う、周囲の連携が必要
- ・企業は敷居を低くしたり、場所やお金を提供したり、お節介を焼くような意識を持つことや、企業の枠を超えてITサービスを安く提供するなどの取組が必要
- ・対象者と企業を結びつけるマッチングシステムを構築し、サービスのプラットフォームを作る。

Bグループ（ご意見の抜粋）

【★地域内の横の連携づくり】

- ・地域の団体や企業などの横のつながりが無い。他企業の案内を気軽にできるように、行政等がつないでほしい。
- ・介護や虐待など困りごとを抱えている人が具体的な支援につながるような試みをしていきたい。
- ・企業が地域の中で具体的に繋がっていきけると良い。

【小さな単位での取り組みの強化】

- ・小さな地域単位でつながる取組を検討してはどうか。
- ・地域に情報を伝える人材として、民生委員とつながることを考える必要がある。
- ・情報共有の会を頻繁に持つと良い。

【情報共有ツールづくり】

- ・興味がない人が参加できるようにする必要がある。
- ・気楽に参加してもらうため、回数を重ねて地道に発信し続ける。
- ・行政のお墨付きが得られれば、登録など市民に案内しやすい。

【市民参加の促進に向けたポイント制度など】

- ・ボランティアに参加したら「かわさきポイント（地域通貨的なもの）」を得て、企業サービスを利用できる制度を実施する。

Cグループ（ご意見の抜粋）

【顔の見える関係づくりからプラットフォームの構築へ】

- ・横のつながり（企業間など）をつくり、顔の見える関係づくりが必要（様々な問題の早期発見、対応）
- ・困りごとを相談すれば助けてもらえる窓口があることを浸透させる。オンラインは敷居が高いので、対面でやれるといい。
- ・困りごとを誰かにつなげられる場など、大きな幹となるプラットフォーム（川崎市民のシンボルになるようなハコモノ）が必要。

【★欲しい人に届ける広報】

- ・情報は年代別に異なる方法で伝えていく。また、デジタルサイネージのように、どんどん情報を流していくことも必要である。
- ・取りこぼしのないように情報を届けるため、ICT化が進む中で取り残されている人への対応が必要。
- ・利用したいと思う人に正確に情報を届ける。

【マッチング】

- ・地域のことをもっと知ってもらうため、地域の団体同士をマッチングする機会の創出
- ・気軽に窓口で相談でき、担当部署に引き継げる環境をつくる。

Dグループ（ご意見の抜粋）

【★プラットフォームの構築、ニーズとサービスの紐付け】

- ・情報が届かない、どこに行けば何のサービスが受けられるのか、紐付けがされていないことなどが課題であるため、ニーズとサービスがマッチングできるような窓口があるといい。
- ・地域の情報を届けるためのプラットフォームを、ITやSNSを活用して構築していくことが必要。
- ・親の介護のためにネットで調べたがダメで、ケアマネージャーさんにお世話になった。アナログも必要である。

【企業のサービスを一覧で】

- ・様々な企業のサービスが見られる一覧表があると良い。
- ・LED電球の中にSIMを埋め込み、一定の時間電気が使われなかったらお伺いするという見守りサービスをやっているが、認知度が課題になっている。

【参画団体の様々な支援】

- ・連絡協議会に参画している団体でも様々な支援を行っている。
- ・助産師会では産後ケアだけでなく母子への様々な支援をしており、命や性教育分野の取組もある。
- ・その他、薬剤師会、幼稚園協会、こども文化センターなども。

Eグループ（ご意見の抜粋）

【★関係者で連携し、情報共有】

- ・日々の生活の中で様々な関係者との出会いの場がほしい。
- ・薬局、医療機関、ケアマネとの地域医療連携

【様々な情報発信で知ってもらうこと】

- ・昼休みに実施する体操等、イベントを通じて知ってもらう。
- ・認知症の方が閉じこもりがち。様々な場所で認知症に関する講座を周知・実施する。
- ・地域包括支援センターにリーフレットを設置してもらう。
- ・色々なサービスを知らない人がいるので、理解しやすい動画で知ってもらう。
- ・世帯や年代に応じた情報発信（世代交流）

【情報の伝え方や人材育成】

- ・情報が整理されているサイトやツールで知らせる。
- ・今日の場のような機会を増やして、マイスター制度をつくるなどし、この人に聞けば間違いない人をつくる。

【既存システムの活用や、ICTの活用】

- ・行政との連絡手段として多職種向けコミュニケーションツール等を活用する。
- ・知ってもらうために、技術革新による仮想空間を活用する。

Fグループ（ご意見の抜粋）

【★情報の共有と見える化】

- ・薬局で認知症病院を紹介しているが、薬局に来ない人に対する手当ができていない。
- ・ポイントカードで高齢者等の来店状況がわかると各店舗で横展開ができる。
- ・配達の時の声かけとちょっとした会話で気づきを得て、報告共有している。
- ・情報の共有により、小さな成功体験を作り、システムを進化させていく。さらにこれらの情報を市に上げていくと良い。

【障害者への対応】

- ・障害者の意見をもっと取り入れて、色々なサービスを使えるようにしたい。
- ・障害者や高齢者が元気な時から支援する必要がある。
- ・障害者への対応は介護保険ほどシステム化されていない。

【各企業・団体が持っているインフラ、情報の活用】

- ・病院の駐車場を地域のイベント会場として提供するなど、各企業・団体が持っている資源や情報を活用していく。
- ・民生委員や町会役員との連携が必要。